

釣れ釣れなるままに

2011年思い出の釣行記 PART. 8

開拓者精神 オールタイム・サ・ア・ベン・ヤス 鹿島釣狂

岩見沢釣遊会第7回大会

☆開催日	平成23年11月13日		
☆開催場所	山越港～森港		
☆入釣場所	湯ノ崎		
☆釣果	カジカ	355 mm	2
	アブラコ	330 mm	7
	ソイ		1
	重量	3220 g	
☆成績	合計点数	1007 点 (2魚種身長+10尾重量)	
	成績	10 位	

桂川河口

天気予報では大会日の空が雨模様だったのだが回復してきて波も穏やかになったようだ。しかし、月曜日からは、北海道に強力な寒気団が押し寄せ雪に変わるということで、一部残っていた冬囲いの始末やらタイヤの交換を済ませながら釣り支度を整えた。今回は交縁会主催の合同大会で、大会準備は会員の参加確認をするぐらいでゆとりを持って釣り道具の準備できていたのだ。

仲間から釣狂はどこに入るのかと尋ねられていたが、鷲ノ木周辺にもう一度だけ挑戦してみると答えておいた。鷲ノ木の外れにある湯ノ崎も気になっていたところだ。今回で3度目になるが初めて入った時はこの付近では珍しい45cm強のアブラコと40cm程のカジ

カを揃えて優勝し、2度目はヤナギの下のドジョウを狙って入ったのだが惨敗してしまったのだ。

今回は堀内氏と一緒に下りることになった。まずは優勝したところに入る。縦に入った消波堤の際を狙って3本の竿を振り込む。しかし、さっぱりアタリが出ない。ここは潮が混んでいるときに期待できるところで、入釣時はすっかり干上がっている状態だったので仕方ないところか。これから4時頃の満潮に向かって潮が混んでくるのでその時まで待つしかないのだろうか。1時間ぐらい何度も打っているとようやくアタリが出て、慎重に合わせるとタカノハだったが、残念ながら35cmには届いていないのでリリースすることになった。

私が打っている消波堤の反対側に入っていた釣り人に様子を伺う。和光会から5名がこの周辺に下りたが皆全滅状態で、2名が湯ノ崎方向に向かったということだ。ゴロタ場で難儀していた堀内氏のところに様子を見に行くと、30cm強のカジカがバツカンに収まっていた。私は、潮込みに期待してエサを取り替えながら何度も打ち直したが、満潮までハゴトコ1匹という有様だった。仕方なく竿をそのままにして湯ノ崎の様子を見に行くことにする。

湯ノ崎

湯ノ崎については道新スポーツで編集された「北海道の海釣り 空からみたポイント」(昭和63年発行)で、次のように紹介されていた。

沖合200mぐらいのところに地名の由来になった温泉がわいており、海水温がやや高い。春、魚の寄りが他よりいくらか早いからかもしれない。50~70mの距離で沖に密生する海藻原を狙うと、岩底ではあるが比較的平坦で、魚を取り込むときにもぐられないように注意すれば、仕掛けを失うことはあまりない。湯ノ崎の本命ポイントといえはこの岩礁地帯だ。特に、岬のほぼ中央部に露出する岩より札幌寄りには、シーズン初期からアブラコの良形が出る。



「北海道の海釣り 空から見たポイント」に掲載されていた航空写真。

ここに行ってみたいのだが、昨年、西川氏が向かったときには、険しい崖が続き下り口がないと言っていたところだ。「空から見たポイント」の航空写真でも道路脇の護岸された防潮堤に所々崩れたところがあるが、そこを下りて行くにはチト手強そうだ。

とにかく自分の目で確かめてみることにしよう。道路の入口には車が入れないように鉄製の鎖で仕切られ「ゴミの不法投棄は法によって懲役または罰金刑に処される」との看板が掛かっていた。その鎖の下をくぐって先に進んでみる。川から200m程進んだところで釣り人のギャギョライトが見える。下りていくところは見あたらないがどのようにして下りたのだろう。更に進んでみると、次第に踏み分け道になってきた。先の本で紹介されていた航空写真では、道路が鮮明に写し出されていたが、それは昭和63年当時に撮影されたものであり、今、私が歩いている道は、草が伸び放題となっており、水たまりもあってキャスターを引くとしてもなかなか困難だろう。時折漁師が使用しているのかタイヤ痕は付いているのだが……。昨年の大会で西川氏が湯の崎への降り口を見つけられなかったというのも頷ける。道路脇の藪を越えた先には高い防潮堤が築かれており、所々崖崩れになっているところを下りるのらしいのだが、どれも急な斜面で下りられるような場所は見当たらなかった。それでも先へ先へと歩いていくと暗闇の中をヘッドランプの明かりだけでは見逃してしまうような草が刈り込まれたところを発見した。こんなところを下りていくのは釣り人しかいないだろう。荷物を担いで下りていくとなると躊躇するような急勾配なのだが、人が踏み分けた形跡を残しているのだ。今日は満月で月明かりも加勢してく

れている。しかも今は空身なので行けないこともないだろう。

急な勾配が2段階になっている。まずは1.5m程ある1段目を下りてみた。荷物を担いで上がるとなると厳しいが、荷物を先に道路に上げてからなら何とかなりそうだ。イタドリやヨシなどの藪をかき分けた先の2段目となる勾配が更に厳しそうだ。高さにして4mぐらいだろうか。手がかりとなる石ころもなく草も生えておらず崩れた土砂が剥き出しの崖なのだ。下りるのはよいとしても上りは足元がズルズルと滑ってしまって上がることは難しいだろう。



イタドリをかき分けて進んだその先は崖になっており、防潮堤の胸壁が崩れてアーチ型になったトンネルの下をくぐり抜けて磯の様子を下見する。

勇気を出してズルズルと滑り下りていくと、古い時代に岩を積み重ねて造ったと思われる幅1mほどの防潮堤があり、その中ほどの胸壁が崩れて磯へとくり抜かれてアーチ型になっているところへと出た。そのアーチ型ドームが崩れてきはしないかと恐る恐る潜り抜けてみると、海水が胸壁まで迫って竿を振ることは出来ないが、その胸壁の横に一人が通ることのできる回廊が続いていた。その回廊を伝って更に50mほど進んでみると、やはり胸壁が崩れてできた玉石原の空き地が現れた。ここでは竿も振れて釣りが出来そうだ。正面には湯の崎の本命場所とされている路頭岩も見えている。しかし、そこから道路上に上ることの出来そうなところは見あたらない。

引き返そう。空身ではなんとかたどり着くことが出来たが、何ぼなんでも荷物を担いでとなると無理である。勇み立っていた元気もなくなり、復路はやはり、先ほどのアーチ型トンネルからの上りで難儀した。手がかりとなるものがない急勾配の土砂を登るのだが、少し登ってはズルズルと滑り落ちてしまう。獣のように4つ足になって一步一步登っていく。そして、最後の上がり口にあったイタドリの茎の根元に手をかけると簡単に折れて危うく元に戻されそうになったが、何とか残った三つ足を踏ん張ってこらえることが出来た。手の指先の爪には砂が入り込んで血がにじみ出していた。

若い頃のことが思い起こされる。

溪流を遡っていくと砂防ダムが現れた。山魚女に混じって岩魚をほどほど釣り、更に上流にいるだろう大岩魚を釣ってやろうと思ったのだが、砂防ダムの脇は高巻きも出来ない崖になっていた。下流に下ってから藪を越えていくのは更に大変そうだ。しかし、その砂防ダムに太い大木が斜めに寄りかかっていたのだ。大水で上流から流されてきたものだろうか。砂防ダムの高さは4 mぐらいで丸太は45度を超えるような急勾配だ。足だけでは登れそうもないので、丸太を抱えるようにして登り始めた。やっとの思いで砂防ダムの上に出てみるとそこは広い淵になり、その上流も小滝が連続しており見事な溪相が続いていたのだ。岩々の落ち込みからは狙いの30 cmを超える岩魚が次から次へと竿を曲げた。夕闇が迫ってきた。大いに満足して川を下ったが、先ほどの砂防ダムの丸太に手こずってしまった。上りはよかったのだが下りとなると足元が見えず、魚籠の重さも手伝って体が固まって動けなくなってしまったのだ。幸いその大木の下は深い淵になっており観念して身を任せた。秋も深まった時期で、頭を覆う川水は冷たかったが、水から顔を出して息をついた時には無事だったことにほっとさせられた。

開拓者精神

上り切って防潮堤の上を進んでみると、海水が胸壁のすぐ近くまで迫っているところを発見した。その後背地はイタドリやヨシの茎が生い茂ってはいるが、平らに広がっていたのだ。ここで釣りをすることは出来ないだろうか。イタドリは足で踏みつけるといとも簡単にポキポキ折れるがヨシは粘り強く立ち上がってくる。それでも何度か踏みつけていると竿の1本ぐらいは振れると思えるような5 m四方の広場が出来上がった。

やおら元気が出てきて、釣り道具を取りに戻る。足は軽快だ。カジカを2本にした堀内氏に行き先を告げてまた来た道を引き返す。キャスターに荷物を積んだのだが、そのキャスターがタイヤ痕で傾いたり、水溜りでぬかるんだりして苦労したが、自分でこさえた広場にたどり着くことが出来た。



開拓者精神でイタドリの茎を踏みつけた広場に竿を設置した。一緒に踏みつけたヨシが仕掛けに絡んでエサ付けを邪魔する。

更に広場を入念に広げてから竿を設置した。ここで心中のつもりだから竿を広角に打ち分けて様子を見る。海面までの高さがありクレーン釣りを余儀なくされるがまあよしとしよう。心なしか仕掛けも遠くに飛んでいるように思える。しかし、ゴロ天秤ネット仕掛けにエサをつけるときに難儀してしまった。ヨシの枯れ枝に引っかかってしまうのだ。ヨシの穂になるともつと厄介でPEラインが絡まってしまう。一々ヨシの穂に付いた種を筆取りしなければならなかったのだ。しかし、これから魚を寄せるとなるとイカゴロやコマセは外せない。

何度か振り込んでいるとその近投にアタリが出た。25号の竿先が小気味よく突き刺さった。今日初めての本命のアタリである。上がってきたカジカは35cmに満たないものだったが、それまでの努力の甲斐が報われたような気がしてうれしさがこみ上げてきた。

背後から朝日が差してきて海をみると潮が澄んでいて、防潮堤の付近は漬け物石大の玉石がくっきりと見え、海藻は付いていない。しかし、遠投した竿がフワフワと揺れて沖には海藻があることがわかる。一艘の磯舟が露頭岩の周辺で作業をしている。遠くでよく見えないが昆布取りに違いない。

そのフワフワしていた竿に明確なアタリが出てアブラコも上がった。これも小物だったがやはり愛おしい。ソイまでも釣れてきた。今年の魚種別大物賞はソイが登録されていない

いのでこれを2魚種身長の審査に提出してみようか。実際には団体賞がありチームに迷惑がかかると思うと出来ないがそう考えるだけでも楽しいのだ。

桂川河口での釣りではすっかり打ちひしがれていた気持ちも、小物ばかりだが規定の10匹重量に提出する魚を揃えてしまってもう満足である。今日は9時締め切りだが、7時半には片付け始めて、早々にその場を立ち去った。

帰り際に湯の崎の入り口での釣り人に防潮堤の上から大声で尋ねてみると、崖を下ったのではなく桂川から歩いてきたとのことである。砂浜ならいざ知らずゴロタ場を湯の崎の先の先まで歩くのは困難を極めるだろう。「ボーイズ・ビー・アンビシャス」ではなく「オールディズ・ビー・アンビシャス」「年をとっても自らの道を切り開け」だ。

雑草が伸び放題の荒れた細道をやっとの思いで桂川河口まで出た。桂川河口ではシャケを狙ってウキルアーを飛ばしている釣り人がいた。釣れたのだろうか。桂川に架かる橋にたどり着くと地元の漁師が私をシャケ釣り師と思ったのか「シャケ釣れたか？」と聞いてくる。シャケを釣りに来たのではないとは言えずに「全く釣れなかった」と本当とも嘘とも取れないような曖昧な返事をしてしまった。漁師と一緒に橋の下の堰堤を覗くと、一部白くなりかけた背びれを見せながらメスシャケが悠然と泳いでいる。その周りを囲むようにオスシャケの群れが見える。ここで産卵行動をしているのだろうか。漁師の話では最盛期には真っ黒くなって堰堤の溜りにシャケが群れを成しているとのことだ。昨年の大会で西川氏が地元の少年から山女魚の生息を確認していたので、その漁師に尋ねてみると、「この川の100mほど上流に砂防ダムがデーンと構えておるう。その上にはシャケもマスも遡れねえ。シャケはこの辺りだけで産卵しているんでねえけえ。山女魚なんぞおるわけなからう。」と言うのだ。

今回の大会には参加できなかった西川氏にもこのことを話してやろう。昨年の大会で不本意な釣りをした西川氏は地元の少年に桂川には山女魚がいるらしいことを聞き出していたのだ。西川氏は大会に参加出来ない理由を「アカハラ釣りはしたくない」「今年の成績が上がらない」「パチンコで負けた」「内浦湾での釣りに魅力を感じない」など様々上げていた。それで、「磯で釣れなければ明けてから桂川で山女魚でも狙ったら？濁川や落部川も山女魚で有名河川だよ」と言っておいたのだ。しかし、今改める。「磯釣りに飽きたら山女魚釣りなんて虫のいいことはできないよ」と。「オールディズ・ビー・アンビシャス」「年をとっても自らの道を切り開け」と。

先ほどの漁師に「どこから来たんだ」と問われたので「岩見沢から」と答えると「おったまげたもんだ」とでも言うように「ひえー」とも「ふえー」とも聞こえるような声を上げた。そして「今度、来んときには先にオレの家に電話すれ。シャケの模様を教えてやんぞ。それから来てもいいんでないかい。」とおっしゃる。結局、お名前も電話番号も聞けずじまいだったが本当に浜の漁師さんは人がいい。さらに、国道までの坂道を上って歩いていると軽トラでやってきて乗せてやるぞとおっしゃる。釣遊会では大会中の車での移動は禁止されていることを告げると硬いことをいうなど言いながらも理解してくれた。漁師は

本当に屈託なく人がいい。

審査結果

優勝	岩本 満	1550点	(カジカ 415mm+アブラコ340mm+7950g)	山越
準優勝	嵐 光博	1536点	(アカハラ425mm+カジカ 373mm+7380g)	落部
3位	吉井 博	1396点	(カジカ 374mm+アカハラ370mm+6520g)	落部
4位	前野達志	1212点	(カジカ 358mm+アカハラ354mm+5000g)	野田生
5位	大前健治	1204点	(アカハラ367mm+カジカ 335mm+5020g)	落部



入賞者の顔ぶれ 左から嵐、岩本、長岡、吉井



審査に提出した10匹の魚。小物ばかりだったが自分では納得のいく釣果なのだ